

戀の句を書くべき扇買ひにけり

藤田湘子

湘子先生はよく揮毫していた。色紙や短冊はもちろん、遠来の者に土産として自句を書いた絵馬を渡したりしていた。全国俳句大会の参加者全員にも記念品として短冊を書いた。その理由は「厳しい『鷹』に五年も投句して、私の息のかかったものを何も持たぬのは・・・という思い」だとか。ある時は、五か月がかりで八百枚あまりの短冊を書いたそうだ。

鞆の中に収まる扇は、土産に携帯するには最適であろう。さりげなく差し出された扇が土産とは、何と粋なことだろう。開いてみればその中には恋の句がある。どんな句だろう。真っ白い扇に心づもりの句を書く時の高揚を想像するだけで、ワクワクする。

1986年 (558.05.06作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京